

## 地域を担う若手に交流機会を

～上有住地区を対象としたアクションプランの作成～

岩手県農村青年クラブ連絡協議会 水野孝洋



### 1. はじめに

住田町は岩手県の東南部に位置し、昭和 30 年 4 月に上有住村、下有住村、世田米町が合併し住田町が誕生した。人口は合併当時の 13,000 人台をピークに減少し、平成 26 年 11 月末では 6,037 人と半数以下になっている。面積は 335 k m<sup>2</sup>。面積の約 90%が森林という典型的な中山間地である

図 1 : 住田町の位置



図 2 : 住田町地区別区分



かみあります  
私は上有住地区で園芸を中心とした農業を営んでいる。就農して以後、県の農業青年組織や町内の商業と連携した農商工連携プロジェクトなど地域外や異業種の方々の輪に入り活動してきた。高校卒業後は住田に戻り消防団活動や公民館青年部の一員として地域活動にも参加していたが、次の年にはその輪の中にはいなくなっていた。活動の意味やそこでの自分の存在意義に気付かず参加するのが億劫になっていたからだ。

地域活動から離れてまもなく東日本大震災が起きた。震災を契機に一緒に活動した支援団体（NPO愛知ネット・邑サポート）との出会いが、地域に対する意識や自分の価値観に大きな影響を及ぼしている。

NPO愛知ネットとは 2011 年 6 月に商工会青年部との交流があり知り合った。それ以降支援活動に協力すべく、隣の大船渡市の避難所を中心に炊き出しに使用する野菜の提供や炊き出しに自ら手伝いに行くようになった。この間の支援活動を通して大きな心境の変化があった。当初思っていたボランティアに対するネガティブなイメージからは真逆の自分でも誰かの為になっているという心の充実感を味わうことができた。半月も立つ頃には住田町内にできた仮設団地に農業で支援できることを考えるようになり家庭菜園の整備を始めた。

その頃にNPO愛知ネットと同じ住田を拠点としてきた邑サポートと出会った。彼らは町内の仮設住宅のコミュニティ支援を目的に活動を展開する予定だったため、私の思いに共感し共に畑の準備を進めることになった。そこから仮設団地でのイベントに協力したり、NPO愛知ネットの拠点となっていたトレーラーハウスで酒を酌み交わすことで、外から

の支援団体と深く関わっていくことになる。

この2つの団体との支援活動を通して仮設住宅に住んでいる方との出会いや町外のお祭り参加等を経験することができた。そのような中で自分の住んでいる集落を意識するようになっていく。小学生の時出ていた盆踊りは今どうなっているのか？4年祭の盛り上がりはどうだったか？集落の雰囲気は今どうなんだろう？というような思いが出てきた中で、地元において地域のことを楽しめないのはもったいない。外から得たものをアウトプットするには地域のことを知り、関わりを持ち自分を知ってもらわなければ何も貢献できない。そう考えると自然に地域活動の輪の中に戻っていた。全国地域リーダー養成塾に参加してますますその思いは強くなっている。

地元に関心が向くなかで未婚の問題や地域の担い手減少、地域への誇りの空洞化など様々な課題が表面化していることに危機感を抱いた。

そこでこのレポートでは若い世代が楽しく、豊かに暮らし、自分達で課題解決に向かう機運をつくるためのアクションプランの作成をすることを目的とする。

## 2. これまでの地域活動における若手の動き

私の住んでいる上有住地区は平成 26 年 9 月末時点で人口 1,348 人（表 1）おり自治公民館単位で5つの集落がある。

表1 H26.9.30住民基本台帳人口(上有住地区)

総数	人口										世帯数	高齢化率 (65歳以上)
	0～9歳	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80～89歳	90歳～		
1348	54	91	100	104	99	210	252	194	202	136	468	41%

出典：住田町住民基本台帳人口より抜粋

### (1) 地域活動の概要

私の住んでいる両向集落は公民館組織の中に総務部や婦人部、福祉部等があり若手は体育青年部に所属している。公民館活動として主に盆踊り、敬老会、上有住地区民体育祭や住田町成人バレーボール大会への参加、権現様（元旦）等の行事がある。他にも農業用水路橋（めがね橋）の清掃やその周辺整備、公民館で高齢者向けにサロンを定期的に行っている。また、上有住地区の式年祭への参加が4年ごとにある。盆踊り（写真1）は体育青年部が主に運営を担っていたり、敬老会は婦人部と事務局が担当するなど各行事をそれぞれの部で役割分担され取り組まれてきた。

1つ現状を挙げると元旦行事の権現様（写真2）は権現様保存部が担い約100軒を回るのだが、15年前と比べ若い人の参加がずいぶん減っている。私が小学生の頃は踊り手は小学生以下、獅子は中学生、お囃子は高校生以上がやっていたが今では獅子に大人が入り

活動を維持している。今後今以上に人手が減っていく中で帰省している人の参加を促す等活動維持に向けた取り組みが必要になってくると思われる。



写真 1 : 盆踊り



写真 2 : 権現様

私は今年度（平成 26 年）から地域活動に積極的に参加するようになったのだが、地元の良さを感じる機会が幾度となくあった。特に 9 月に行われた上有住 4 年祭（写真 3）では 1 ヶ月前から踊りの練習や山車の整備等、集落が一丸となっている中で人の温かみを強く感じた。地域の中で生きるということは地元の人とどう関わっていくのかとイコールなのだと思う。祭りを通して地域を担う意義、喜びを再確認できた。

この式年祭ではいつもは見られない地元出身者の参加があったのだが通常の行事では参加は少ない。この違いはイベントの規模の大きさでは無く、参加者の満足感や達成感がマイナスの部分（面倒・無関心）を上回っているからだと思う。地元で生活をしながら地域活動に参加していない若手を取り込むためには、使命感や責任感だけではなく参加したいと思える雰囲気や気づきが必要ではないかと思う。



写真 3 : 両向集落の山車

#### （2）若手の動き

現在地域行事は年々人手不足が問題となっており行事の維持も大変になってきたが、30 年前地域に活気があった頃は人材も豊富だったが、集落ごとにあった青年会（団）活動（現在は公民館体育青年部等）が活発だったことの要因も大きい。青年会は 20 代を中心とした組織で青年なら誰もが参加するのが当たり前の風潮があった。

上有住地区盆踊りや地区民運動会などの取り組みが集落外との交流や地域の担い手としての誇りの醸成に繋がっていた。しかし、時代の変遷により地域活動に意義を持たず参加者が徐々に減っていき青年会（団）組織としての維持が困難になっていった。今では 5 つの集落のうち青年会としての組織があるのは 1 つだけとなり、集落外との関わりがほとんど無くなってしまっているのが現状である。

### 3. 私が思う地域の問題意識

私の地域を見たときにひとえに外部とつながる機会が少ないことが様々な課題に影響していると考えます。集落内での人の結びつきは強く、団結力があるが、外から入りにくい雰囲気も原因があると思う。私が住む上有住地区を見ても集落外との関わりが薄い、町内

にある5地区の地区間交流はほとんど無いに等しい。私は特に震災をきっかけに他地区の人と関わることが多くなったが通常生活の中で集落外の人とつながる機会は乏しいと思う。

人口減少の中で集落の人だけの関わりでは状況が好転していかないのが現状だ。私が就農以後多くの人と関わっていく中で仕事や家庭、地域に対して見つめ直すきっかけとなったが、集落の中で黙々と農業をしていたら今のようなまちづくりの発想や自分の人生に対して客観的に考えられていなかったと思う。

地域の重要課題である未婚の問題では集落の中にいるだけでは異性との接点が少なく、自ら人のいる場面に出て行かないと人との繋がりが築きにくい。昔もある一定の割合で未婚の層がいたと思うが現在は結婚に対する意識の低下により未婚割合が大きくなっている。恋愛結婚が当たり前になっている現在、人との関わりが希薄では根本的な解決には向かわないと思われる。また、地域を見たときに男性はある程度参加する場があるが若い女性が活動・交流する機会が少ないように感じる。男女の出会いに限らず集落や地区を越えて人とつながる取り組みが今後必要だと考える。

#### 4. 町内に見られる新たな動き

私の町では昔からスポーツが盛んで野球やバレーボールに参加している青年は比較的多く見受けられる。しかし、スポーツや地域活動以外に青年の居場所はほとんどないのが現状だ。私も関わっている取り組みで震災以降始まった2つの事例を紹介したい。

##### (1) アリスの不思議な文化祭 (写真4)

震災を機に住田町に常駐して活動していたNPO 愛知ネットの方の音頭で住田の将来を考える若者グループSMP(Sumita Meeting Practice)が2012年に立ち上がった。メンバーは観光協会の事務局をはじめ町内で仕事に従事している人が11人。町外(邑サポート・NPO 愛知ネット等)の方が10名で男女比は13:8となっている。そのSMP会議の中で「廃校となった下有住小学校を利用して、住田町の良さをみんなで再確認しよう!!」というアイデアが出たことで、文化祭が企画・実行された。



写真4：旧下有住小学校  
文化祭HPより

文化祭の趣旨は農村文化とアートを通じて交流し、震災被災者への支援と住田町の活性化を目的に開催され、各教室に手づくり市や魔女ワークショップ、レトロ館等が準備された。他にも図書館でのライブコンサートや、外ではチェンソーアートの実演や屋台が立ち並び来客者に楽しんでもらえるイベントとなった。参加者は地域のおじいちゃんおばあちゃんや子供連れの家族を始め仮設団地に住んでいる方も多数来場いただいた。参加者からは廃校になった小学校にまたこれ

で嬉しいとの声や、素敵な空間で見所が多くてびっくりしたとの意見が出た。

次の年も同じ会場で「アリスの不思議なクリスマス」がSMP中心に開催されている。人が集まればやれることが無限大にあることを証明してくれた取り組みとして、今後も継続的に開催されることを期待したい。今年度も2015年の3月に3度目の開催に向け準備

を進めている。

### (2) SUMITA音楽サークル音蔵 (写真5)

2013年から音楽を通じた世代間交流プロジェクトを進めるために、住田町在住・在勤の20～40代の若い世代の人たちの想いで立ち上がった。(会員13人)音蔵ではバンドの結成や練習、スキルアップ講習、町内外のイベントでのライブ出演など、オトナも子どもも交えて展開している。設立の経緯としては仮設住宅の支援をしていた邑サポートの方と町内の方が地域行事で知り合いバンド結成。住田で音楽を演奏できる・楽しめる環境を模索していたところ、町のまちづくり補助金制度があることを知りそれに応募したのが設立のきっかけとなっている。まちの地域資源である蔵を拠点に活動しており毎月6日/16日/26日にサロンを開催している。心の居場所としてもメンバーのよりどころとなっており徐々に参加メンバーも増え女性の参加も目立ってきている。



写真5：活動拠点の音蔵  
音蔵HPより

### (3) 考察

上記の2つの動きは最近ではあまり見られなかった地区外の人との交流に繋がっていたり若者の居場所づくりにもなっている。今後の課題としては幅広く多くの人に活動が認知され、動きの輪が広まるように新たな人材の巻き込み方を考える必要がある。震災を機に様々な動きが出てきた中で外の人から影響を受けた人は全体をみれば一部分に過ぎないと思う。どんなに素晴らしい取り組みであっても関わりが無ければ存在価値に気づけず、地域住民の誇りには繋がらないと思うからだ。ヒトやムラの活気が衰退していく中で1人1人が自分ごとの視点に立って、地域で生活する意義や課題を見つめることが今必要になっていると思う。次の章からは先発事例を参考に上有住地区に住む20～30代を中心に、若者の交流機会をつくるためのアクションプランを考えたい。

## 5. 先発事例

私は新潟県燕市のつばめ若者会議の事例を参考にしながら上有住版若者会議に取り組みたいと思っている。

### (1) つばめ若者会議とは

つばめ若者会議(写真6)は次世代を担う若者が集い、20年後の燕市のビジョンを描きながらビジョンに近づくためのアイデアを創発し、実際にアクションを起こしていく会議体となっている。この会議では3つの目標を掲げていて、1つ目は理想とする燕市の将来像を実現するためのアイデアを考える。2つ目は若者のまちづくりに対する意識の醸成。3つ目は若者同士の交流による「つながり」の強化としている。会議のかたちとしてはまず内部組織の運営委員会が若者会議の運営について話し合う運営会議(毎月1回開催)を行い、メンバー全員で話し合ったり、交流・情報共有を行う全体会議(不定期開催)を開催している。また、全体会議とは別にテーマ毎にチームに分かれ、テーマについて深く話し合う自主会議(不定期開催)も行われている。



写真6：アクションプラン発表会  
燕市HPより

初年度の若者会議開催では自分たちの住んでいる燕市について魅力と課題を確認しながら、どんなまちにしていきたいかを考えていった。その中で「幸福」をキーワードにビジョンを考え、まちのビジョンの大義を「つばめに住む人の幸福を増やす」とした。「私」が幸せだなと感じることを共有し、そこからまちがどのような状態にあったら、自分たちの

幸せを生み出すことができるのかを想像し、さらにビジョンに近づくためのアイデアを考える。そのような話し合いを重ねることで具体的な行動へとつながっている。会議ではアイデアを創造すると同時にそのアイデアを実行できるチームになれるように、ワークショップとチームビルディングを組み合わせた方法で話し合いを重ねている。(写真7)



写真7：ワークショップ  
燕市HPより

#### (2) アクションプランの例

現在ではつばめ若者会議から生まれた9つのチームがアクションプランの実行を行っている。いくつか事例を紹介したい。

子育てチーム「HUG+はぐたすプロジェクト」(9名)。チームの目的は「その子らしい、その子にあった子育てができる環境をつくる」こととし、核家族化や両親の共働き等の子育てに対する物理的、精神的余裕が無い

現状を把握し、子育て世代の心理マップを作成。そこから「共感」という言葉に着目し母親、父親、曾祖母や地域そして子どもたちの苦悩や悩み、葛藤をみんなで「共感」し思いやりを持つことで、それぞれの家庭で子どもを受け止めながら自分らしい子育てについて考えるゆとりが生まれ、周囲の人たちと関わりながら、楽しく親子とも満足しながら毎日が送れるような状況を作っていきたいと考えている。実現に向けて3つのテーマでみんなの「共感」を引き出せる企画を立案。1つ目はパパと子どもと一緒に参加したくなる企画。

2つ目はママが心の充電を図れる企画。3つ目は畑作業など季節を感じられるスローライフを提案していく企画となっている。

スポーツチーム「SMARTプロジェクト」(5名)。Smartの理念は「すべての燕市民が、生涯素晴らしい環境でスポーツを楽しみ、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を実現する」こととし、「する・支える・観る」すべての人々がそれぞれのステージでスポーツを楽しむ環境と様々な立場で人々がつながることのできる拠点をつくりたいと考えている。健常者も障害を持っている人もすべての人がスポーツを楽しめる機会をつくりたい！スポーツしに来た人が帰りが



写真8：SMART活動記録  
燕市HPより

人もすべての人がスポーツを楽しめる機会をつくりたい！スポーツしに来た人が帰りが

けに立ち寄れるビアバーがあったり、汗を流せるお風呂があったり、スポーツを学べるライブラリーがあったり、そんな一日いても飽きないスポーツ拠点をつくりたい！などの夢をスポーツを軸に実現していきたいと考えている。(写真8)

## 6. 私のアクションプラン

### (1) プランの経緯

若者会議の必要性を考えるようになった経緯が 2013 年にある。上有住地区を担当とする集落支援員の呼びかけにより上有住地区の若手が集まる機会があり(10 数人)、集落外の若手が顔を合わせて意見を出し合う場となった。そこでは独身者のために婚活イベントをやったらどうか等の前向きな意見が出るなど今後の可能性を感じる時間となった。しかし、1 度きりで集まることが無くなったので実際に行動に移ることはなく残念に思っていた。同じ地区の若い人が定期的に集まって語らう場があれば、何かアクションが起きるのではないかと思う。1 つの寄合で終わるのではなく、上有住版若者会議ではつばめ若者会議のように明確なビジョン持つことと、最終的に実行できるチームを生み出す会議体を目指したい。

時代の変遷とともに人との関わりが薄くなっていく中で同じ上有住地区の住民でも顔は見たことがあるがその人がどんな仕事に携わり、何に興味があるのか。もしくは地域に対して何を思っているのかがよくわからないのが現状である。ヒトが少なくなっているが一定の人数は生活をしている中でお互いを理解し合う機会が必要ではないかと考える。それは、自分達の足下にある課題を見つめるためには多くの人と関わることによって、解決すべきことが見えてくると思うからだ。

### (2) 目的と視点

震災後、外の人との関わりが新たな取り組みへの外発的動機になっている一方、地域に住んでいる人の内発的なモチベーションがないと持続的な発展が難しいと実感している。そのような中で上有住若者会議では若者のつながりを強化することを第 1 の目的としたい。

地域にどのような人がいるのかを知り、同じ趣味や取り組み等で輪を作ることを第 1 ステージとし、第 2 ステージでは共通のテーマで集まったチームごとに課題解決に向けたアイデアの具現化に取り組みたい。集まってつながりができるだけでも大きな成果だと思うが、そこから地域が抱える課題に対して 1 人 1 人が意見やアイデアを出し合い、解決に向け行動に起こすことが重要になってくると考える。第 3 ステージでは上有住で起きた若者のムーブメントを町内全体へと波及していくことが住田の活性化へと繋がっていくと考える。

実際の会議では主にワークショップを中心に運営していこうと思う。つばめ若者会議のワークショップの中で行われた地域の課題や地域資源の掘り下げやアイデアワークなどステージに合った内容を取り入れたい。また、固い内容だけでなく参加者の活発な意見交換ができるようにするためのアイスブレイクや、チームビルディングの要素を加えたチーム内の信頼関係を生み出すようなゲームなど、次回も参加したいと思える仕掛けを積極的に取り入れたいと思う。

(3) 若者会議開催に向けて

実際の会議開催までの動きとしては次のようなことが必要になってくる。ステップ1は連携者との目的共有。開催を検討する上で上有住地区集落支援員、邑サポートに協力をお願いしたいと考えている。集落支援員へは地区内への声かけや情報提供を、邑サポートにはワークショップ運営等について力をお借りしたいと思っている。

ステップ2は各集落の若手代表者との打ち合わせ。ここでの代表者は公民館青年部長や子育て世代の若いお母さんをターゲットに考えている。全体で行う前に各集落への周知を含め交流機会の重要性と現状の課題の共有を代表者と確認したい。必要があれば各集落で説明会を行うこともイメージしておく。ステップ3で上有住若者会議開催となる。

開催に向けて私の現状課題としては中の地域の様々な状況を十分に理解していないことです。理解するためには人の繋がりが重要だと思います。高校卒業後地元に戻って2年目からは地域活動から離れてしまい、今年度になってから参加するようになったため地元にいる人と関わりが少なくなることが一番の課題となっています。地域で何かを取り組むためには人的ネットワークが必要不可欠となってくるため、地域にいる人達と今後どれだけ知り合えるかが重要だと実感している。自ら地域の行事ごとやスポーツなど人の輪の中にどんどん入っていき地域を変える原動力になっていけるようにしたい。

7. おわりに

このレポート作成において震災を契機に取り組んできたことを私なりに客観的に見つめ直すことができました。一農家として全国地域リーダー養成塾に参加させていただき、まちづくりとはなにか、住民自治とはどうあるべきかなど住民目線で地域のことを深く考える1年でした。と同時に本業である農業に対しても今後を考えさせられる期間になりました。家の仕事を一人前にこなした上で余力を他の活動に振り分ける分には問題ありませんが、本業が疎かになるようでは本末転倒になってしまいます。今後様々な取り組みに関わっていく中で益々農業者としての自立、発展が求められてくると思います。

最後に先駆的地域づくり現地調査で伺った熊本県水俣市の地元学の著者、吉本哲朗さんから頂いたサインが印象に残っているので書きます。

「人様は変えられないから自分が変わる」

変化を恐れず、自分の人生・地域を存分に楽しみたいと思います。ありがとうございました。

※ 参考文献

住田町ホームページ

<http://www.town.sumita.iwate.jp/>

住田町観光協会ホームページ

<http://sumitakankou.blogspot.jp/>

SUMITA音楽サークル音蔵ホームページ

[http://music.geocities.jp/sumita\\_negura/index.html](http://music.geocities.jp/sumita_negura/index.html)



燕市ホームページ

<http://www.city.tsubame.niigata.jp/>